

特集「貧困」克服への取り組み

「格差社会」の進行が、昨今の不況の中で、社会的に困難な立場にある人々を一層深刻な「貧困」に追いやり、重大な人権問題になっています。このような中であって、困難な人々を支援する取り組みが進められています。この取り組みに学び、何が必要なのかを考えます。

「住まい」と「食」を提供しながら、一緒に再出発の道を探る



さか もと しん いち
坂本 眞一さん
大阪希望館運営協議会事務局長
連合大阪副事務局長
大阪市地域協議会事務局長



おきの みちひこ
沖野 充彦さん
大阪希望館運営協議会
事務局次長(相談センター担当)
特定非営利活動法人
釜ヶ崎支援機構事務局長

相談に来た時点で 食べるものも泊まる場所もない

坂本 大阪希望館では、仕事と住まいを失った人に、緊急的に「住まい」と「食」を提供しながら、再出発の方向と方法を一緒に考え、支援しています。希望館の名称は、作家難波利三さんの小説『大阪希望館』からいただきました。希望館が発足するまで、私は連合大阪で、沖野さんは釜ヶ崎支援機構で、それぞれ相談に関わる仕事をしてきました。「ネットカフェ難民」の支援を進める大阪チャレンジネットで協働したことがきっかけです。

昨年秋に世界的な金融不安が起こり、大阪では年が明けた2009年1月から派遣切りにあった人々からの相談が一気に増えました。みんなギリギリまでがんばって、相談に来た時点で「今日食べるものも、泊まる場所もない」という状況まで追い込まれている人も少なくありませんでした。もう行政だけに頼ってられる状況じゃない。民間の力で、緊急対応という入口はもちろん、就労という出口も開拓していこうと、沖野さんから提案を受けたのが活動のきっかけです。

沖野 うちにくる相談にも転々と派遣労働をして、最終的に仕事がなく野宿生活になる若い人々からの相談が少しずつ増えてきていました。釜ヶ崎に象徴される旧来のホームレス層は、建設など肉体労働に従事していた人がほとんどです。何人かで作業し、仕事が終わってから一緒に酒を飲むなどの集団性がありました。仕事が終われば釜ヶ崎に戻り、また仕事を探す。先輩から仕事や生活の知恵を教わるという助け合いもあります。釜ヶ崎は仕事の中継点であり、第二のふるさとのような役割も果たしていたわけです。

一方、今の若い人たちは人と仕事や生活をともにするという経験が少なく、非常にひ弱にされている

と感じます。また、仕事も携帯で連絡をとり、ラインで与えられた仕事を黙って繰り返すだけという状態で、バラバラです。ホームレス問題と地続きだけど、今までとは違う。従来のホームレス支援とは違う視点での支援が必要だと考えました。

市民運動としての「大阪希望館」を広げていく

坂本 施設保護と居宅福祉を兼ね備えた支援が必要だということですね。施設保護はケアがあるがプライバシーがない、居宅福祉はプライバシーはあるがケアがないということが多いのですが、希望館では両方をやろうということですよ。

もうひとつ、議論をしていて面白いと思ったのは、ひとつの建物を希望館とするのではなく、この活動に関わる人やまち、インターネットというバーチャルな関係も含めて、コミュニティー全体を「希望館」と呼ぼうということでした。

沖野 相談を受けるだけでなく、来た人が何らかの支援を受けられるものをつくりたかった。ただ現実問題として希望館が受け入れられる人数には限りがあります。生活保護施設やホームレス対策の自立支援センターなどとのネットワークをはじめ、就労という“出口”を確保する働きかけや資金集めも含めた全体が「大阪希望館」という市民運動だととらえています。

一番難しいのが“出口”の問題です。希望館で住まいを確保して職業訓練を受けたとしても、仕事はそう簡単には見つかりません。就労ができたとしても、以前と同じ非正規の働き方になってしまう可能性が大きい。これは本人の責任ではありません。非正規雇用の問題に根本的なところから取り組まなければ、仕事を失ったとたんに住まいまでも失う人は増え続けると思います。

自分の生活を意識化し、生きる力を身につける「反貧困学習」



やま だ かつ じ
山田 勝治さん
(大阪府立西成高等学校校長)



ひ げ あき お
肥下 彰男さん
(大阪府立西成高等学校教諭)

自分の足下を学び、生活を「意識化」する

山田 高校進学率96%という中で、さまざまな背景をもつ生徒がいて、将来の見通しがたてにくいというのが現状です。しかし何とか展望をもたせたいと卒業させたいという思いがありました。一方、西成は釜ヶ崎や被差別部落、在日問題など日本社会における課題が集約された地域でもあります。そこで、まず自分たちの足下を勉強しようと「西成学習」が始まりました。

肥下 「西成学習」を始める前、生徒たちの様子に荒れている部分が見られました。なぜだろうと考え、生徒も教師も厳しい生活背景への認識のなさが生徒の「荒れ」につながっているのではないか、と思に至りました。そこで、足下を考えるための教材づくりが始まったんです。教師である私たちにとっても必要なことでした。

これまでも西成高校では「反差別」を軸にした人権学習をおこなってきましたが、非正規雇用の拡大やひとり親家庭の増加など、近年さらに厳しさを増してきている生徒たちの生活環境を考えると、「反貧困」という軸がより実感をもって取り組めるのではないかと考えました。こうして2007年度より「反貧困学習」が始まりました。

身近なテーマに、生徒たちが自らの生活を語り始めた

肥下 反貧困学習には7つの視点と20のテーマがあります。(1)自らの生活を「意識化」する(2)現代的な貧困を生み出している社会構造に気づく(3)「西成学習」を通して、差別と貧困との関係に気づく(4)現在ある社会保障制度についての理解を深め

る(5)非正規雇用労働者の権利に気づく(6)究極の貧困である「野宿者」問題を通して生徒集団の育成をはかる(7)「新たな」社会像を描き、その社会を創造する主体を形成する という視点を念頭に、「ネットカフェ難民」「ホームレス中学生」「ワーキングプア」など10代の生徒に身近な問題を教材にとりあげ、生徒どうしや教師と生徒が対話します。生徒たちのなかには、家族が非正規雇用や派遣で働いていたり、ひとり親家庭や親との関係がうまくいっていなかったりする子が少なくありません。感想には生徒たちの実感がこもった言葉が書き出されました。なかでもシングルマザーをとりあげた時は、積極的に自分の生活を書いてきました。それを見て、「生徒たちの生活を中心にした学習が本当の人権教育だ」と確信しました。そして、高校は子どもの権利から労働者の権利につなげる時期だと考えるようになりました。その権利侵害にどう取り組むのか。そのとき、解放運動や労働運動に学ぶことがたくさんあるのです。

山田 しんどさを人に向けて語るというのは難しいけれど、生徒たちには自分を表現したいという思いも、表現することによって人とつながっていくという実感ももっています。「しんどい」というひと言を教師たちがていねいに拾い上げ、「具体的にどういうこと?」と返してきた積み重ねが、少しずつ生徒たちの気づきや生活の「意識化」につながっているのを感じています。貧困層だから「反貧困」を掲げるのではありません。誰もが貧困に陥らないような社会の仕組みをともに学び、生きる力を身につけてほしいと願っています。



「格差社会」と不況による「貧困」の中で、生活や就労、教育の分野で、困難な人々を支え、「貧困」を克服しようとする取り組みが進められています。そこでは、常にその人に寄り添い、困難な生活を一緒に考えて、そこから「反貧困」の生きる力を見つけ出していこうとする、まさしく一緒に「希望」をつかみとる営みがあります。このような取り組みを広げていくことこそが大切だと感じました。